

第二次世界大戦から90年後の日本。人生の目標を見失いかけている司法浪人の佐伯健太郎は、姉の思いつきから、会ったことのない祖父・宮部久蔵の生涯を友人の話を通して追ってゆきます。タイトルの0とは戦闘機、零戦のことで、宮部は誰もが認める凄腕を持つパイロットでした。真珠湾からラバウル、ガダルカナル・・・と、戦況の悪化と共に、宮部も激戦地へ送られてゆきます。自分の命について話すことが出来なかった時代に、宮部は「ぜったいに生きて帰る」と公言します。命を大切にすゝ臆病者と捉えられていた時代に、自分の気持ちを正直に言うことは、臆病者どころか、相応な覚悟が必要だっただろうと想像します。しかし、宮部は終戦間近、特攻隊に志願し、命を落とすのです。なぜ、あれほどまでに生に執着していた宮部が特攻隊として命をなげうつたのか・・・。

他人を生かすために自分の命を投げ出したヒミツが最後に明かされてゆきます。どんな状況であつても 自分の気持ちにウソをつかない、そしてノーと言う勇気を宮部は、どちらも持っていました。平和な現代でも、ともすれば大勢の意見に流されそうになる中で、当時、ノーが言えるということは、想像出来ないことだっただろう。戦後、すさまじい復興を成し遂げた日本ですが、宮部のような人々が戦争で命を落とさず生き続けてくれたらならば、今の日本はまた違ったものになっていたかもしれない、と思いました。

Y・C・



講談社

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株) ファッションビジネス・御堂筋新聞